さいたまここに人あり

心の中に平和の砦を
―地域に根ざした秩父ユネスコ活動

皆野高校
江田伸男さん

秩父ユネスコにかかわり18年

秩父ユネスコ活動のきっかけは1997年に小鹿野高校の生徒が修学旅行先の広島で、原爆ドームを見て衝撃を受け、その模型を作りだしたのがきっかけです。原爆ドームの模型を作りたいとなって始まり、それから国際交流が始まって、チェコやロシアでも模型作りが広がりました。

この経過は三省堂の高校2年生の英語の教科書にも英文で載っています。最初は原爆ドームづくりという静的な活動、絵を描くとか、そこから詩を書く子がいて、それを朗読してみようとなって、それから今度は劇みたいな形にしようとなって動きも付けてやったり、これが子ども、幼稚園生なども参加して、ダンスをやったり徐々に発表の形を広げていきました。

それが平和の学びの場になり、秩父ユネスコの立ちあげになったのです。その本格的な活動は2003年になりますが、日本ユネスコ協会連盟に加盟承認を提出した理由は、ユネスコ学習宣言に「学習権とは、～自分自身の世界を読み取り、歴史を綴る権利であり～人々を成り行き任せの客体から自らの歴史をつくる主体にかえていくものである。」とありさらに、ユネスコ憲章の前文に「戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と、書かれているからです。私たちの活動はユネスコの理念に沿う活動でありたいと願っています。

私自身のことで言うと、数学の教員ですが30歳後半から8年間家庭科を教えました。家庭科というのは生命、子育て、人間に関わること、いのちの教育なんですね。その時に、価値観が変わったんですね。それが大きな一番の転機ですね。ちょうど私の子どもが小さかったものですから、180度視点が変わりましたね。組合活動への関わり方もそれから大きく

変わりました。

子どもから大人まで、地域で「平和と文化」の発信

具体的な活動をあげてみます。一つはこの活動を始めたころに手作業などを通しての「平和と文化」の発信で、模型作り、絵画や詩の制作です。二つにはその発展としての詩の朗読、群読、演劇活動です。言ってみれば静から動ということです。活動は主に春に行う公演を軸にするようになってきました。それに向けて半年以上かけて話し合い、現地取材や学習をしていき、シナリオ化しました。

２００７年はイラクと日本の若者を結んだ物語を群読「Ｌｉｆｅ」で高校生たちとつくりました。２００８年は日常のエピソードを基にした内容の朗読劇「私たちの憲法」の発表を、高校生・保育士・会社員と幅広い参加で行いました。併せて、アーサー・ビナードさんの講演も行いました。

そして２００９年、朗読劇「天国からのメッセージ」で、広島やアウシュビッツ、イラクの死者の思いを想像して、10代から20代の若者が「憲法９条の価値はなんだ」と、取材や調査・学習を行って作りました。併せて、舞台女優の有馬理恵さんの講演も行いました。

２０１１年は創作舞台劇で「あらかわ」を公演しました。地元を流れる荒川を舞台にして環境問題をテーマに、幼稚園生や小学生たちも参加し多様な表現を使っての舞台構成でした。

２０１２年は創作舞台「星のかけらたち」で秩父の武甲山から「結」の再生を祈る劇を創りました。経済成長の犠牲となった武甲山と経済成長のもとで生み出された「原発」を半年にわたるフィールドワークを行いました。大学生も一緒になって公演しました。

２０１３年は創作舞台「核の恐ろしさを知るとき」を公演しました。広島の被爆者の話や取材をもとに高校生たちがシナリオをつくりました。絵の制作も朗読も高校生たちが主体となりました。

２０１４年は創作舞台「未来コネクション　核の恐ろしさ」で、現地長崎を取材し、憲法学習などをもとにシナリオをつくりました。絵の制作や朗読も含めて、高校生たちの自主的な活動が定着してきました。

身近な生徒に声をかけてスタッフに

スタッフを集めるには、ユネスコに関わっている大人たちが身近な若者、高校生に直接声をかけるようにしています。例えば、イベントでこういうことをやりたいけど手伝ってくれないかと。埼玉高校生平和サークル「ピースウイング」に参加して広島や長崎に行ったりして、そこで体験したことをもとに、シナリオにしていくようにしました。どんな子たちかというと、表現活動なので絵のうまい子とか、アニメとか声優に興味をもっている子とか朗読のうまい子ですね。部活で言えば美術イラスト系ですね。もちろんそれ以外の分野が得意な子もいます。昼休みや放課後に図書館によく来る子って、文化活動に関心を持っている子が多いですね。マンガもそうですけど、結構柔らかい小説に興味を持つ子、そういう子に声をかけます。そういう文化を通してのつながりが大きいですね。他の学校

には図書館に掲示してもらって、こういうイベントがあるだけど手伝ってもらえないかということで来てくれた子もいます。どんな子にも眠っている可能性を感じますね。

学び、体験する中で「着地点」を見つける

昨年の夏、戦争展に参加し、そこで俳人の金子兜太さんのインタビューを行うことになり、二人の生徒が代表として私と一緒にご自宅を訪ねました。その時、事前学習をしました。2冊の戦争体験の本があったので読み合わせを行い、それから訪ねました。でも生徒は直接金子さんから戦争体験を聞いて初めて、価値観の転換が起こり、ガラッと変わるんです。戦争について、自分がいかに他人事として考えていたか、いかに自分が知らなかったということで変わっていくんです。

私なんてその機会を設定するだけで、実際に活動に取り組むのは、可能性を持っているのは彼らです。彼らがいかに育っていくことか。時間をかければ芽生えてきます。学校のものさしで、学力的にも芳しくないと思われている子どもたちも、この活動の中で変化していきます。学んだこと、体験したことを表現する場があるということですね、それが一番大きい。

金子さんの所へ行って話を聞いたことで、彼らなりに「着地点」があるんですね。テストの結果という数字では表せない評価です。もっと大事な評価である表現の場が確保されているということです。それに向けて彼らは一生懸命に学び、シナリオを書いたりします。広島に行くときも、半年後にこういう表現をやるという目的意識があるので、本当に良く吸収しますね。

本当に学ぶというのは、こういうことだと思わされました。何かを共同して作っていく中で、自分なりの立ち位置を見つけて表現します。何が足りないかというのも理解します。活動というのは、自分なりに得意なものを発揮してみんなと造りあげたという達成感が大切です。コミュニケーション能力なんて作ろうとして作るのでなく、そういう活動とか表現の場で本当のコミュニケーション力が自然と身についていくんですね。そういう場では、子どもたちにとっては、共同活動だから自然にコミュニケーションが生まれてくるんです。

地域での生徒の活動は、学校での活動とは違う面があるんです。学力が乏しいと言われたりするけれど、それは学校のものさしです。例えば言葉や動作での表現、絵を描くとか、あるいはシナリオを作るとかの活動は、学校でのテストで計れるものさしでは測れないものです。この活動に参加する生徒は、学校の中では必ずしもいわゆる「いい生徒、優秀な生徒」ではないんです。シナリオを作るとか、朗読して訴えることとか、そういったところで生徒の持っているもの、潜在能力が花開きます。まさに種が芽吹き花が咲くそういう成長の場を地域でつく

り、子どもたちの成長がみられる喜びが、私の活動の原動力となっています。

ドキュメンタリー映画「種まきうさぎ」をみてほしい

「種まきうさぎ」の映画づくりへの協力をしました。この映画は、福島の高校生たちが高校在学中に、自分たちの放射線被災をみつめながら学校の枠から踏み出して福島の同じ高校生たちと交流し、同じように核被災問題に向き合う高知・静岡・東京などの全国の高校生や現地の人々とともに交流し、歩む姿を記録したものです。これに秩父ユネスコも出演することになりました。

出演のキッカケは、その中心となっていた福島の高校生で、いまは大学に在学中の長島楓さんが、一昨年の12月に秩父に来てくれて、自分の高校時代のことだとか福島の今の状況を話してくれたんですね。秩父ユネスコの高校生たちが彼女の話を聞いて、その生徒たちが中心になって作成中のシナリオに福島の高校生の放射線被災の話を入れました。なおかつその子たちは一昨年の秋に広島にも行ったので、広島の被爆をベースにしてシナリオを作ったんです。それをもとにオリジナルの絵を描いて、朗読創作舞台を昨年春に行い、夏にも再公演を行ったんです。

さかのぼること、一昨年の夏、福島で若者の集会があり、そこに監督の森康行さんが取材に来ていて、私たちも参加していた。そこで、取材させてくれないかということになったんです。主に昨年春の公演を取材してもらって映画に出演させてもらったということです。

ぜひ若者たちのひたむきな活動や活躍、市民の運動を映画化したこの作品を観てください

自分たちで歴史をつくる

この時期で大事なことは主権者教育だと思いますね。校内での活動はいろいろと制約がかかっています。なかなか学校という現場は息苦しいではないですか。そういったときに、校外に学びの場を作っておくといいですね。憲法の理念に基づく理想の教育を学校で実践することはすごく難しくなっています。私の場合、現場でのストレスをためないためにも、精神のバランスを保つためにも、地域での学びの場は大切だと感じています。だから若い先生方にも学校現場や部活動の指導も大切だけれど、外も見てほしいと願っています。

受験競争や、運動部などに見られる、勝つか負けるか、そういう価値観しかない教育は間違っていると思います。競争主義をあおる教育や解釈改憲によって集団的自衛権の行使を容認する動きは、自分とは違う集団（人種や民族の違い、宗教の違いなど）は排斥の対象にするという素地を作ってしまいます。

今こそ、ユネスコが掲げる学習権—自分自身の世界を読み取り、歴史を綴る権利であり（中略）人々を成り行き任せの客体から自らの歴史をつくる主体にかえていくものである—の精神を地域で生かす取り組みが必要とされていると思います。